環境ウイルス学の将来

The future of environmental virology

・ 代表者： 田中宏明 (Hiroaki Tanaka)

・ 日　時： 2009 年 2 月 13 日 (13/2/2009)

・ 場　所： 京都大学大学院工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター
Research Center for Environmental Quality Management, Graduate School of engineering, Kyoto University

・ 主　催： 京都大学グローバル COE プログラム
「アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点」
Kyoto University Global COE Program "Global Center for Education and Research on Human Security Engineering for Asian Megacities"

・ 共　催： 京都大学大学院工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター
Research Center for Environmental Quality Management, Graduate School of engineering, Kyoto University

・ 主な参加者
- 田中宏明、清水芳久、山下尚之、中田典秀、金イルホ(京都大学)
- 中島淳(立命館大学)、越川博元(龍谷大学)

・ シンポジウムの目的概要
This symposium intended to discuss virus detection method, and findings and ideas on the control of pathogens in water.

・プログラム（タイムスケジュール，講演者の名前，講演タイトル含む，別途ファイル可）
- 講演時間　：　13：00～16：00
- 講演者の名前　：　Prof. Joan B. Rose (Michigan State University)
- 講演タイトル　：　環境ウイルス学の将来(The future of environmental virology)

・シンポジウムの様子，得られた成果

講演者の口頭講演では、約３０名程度が聴衆として参加し、大変充実した意見交換やディスカッションがなされた。講演内容としては、水環境中におけるウイルスの重要性、米国や途上国でのウイルス検出状況、病原性微生物の監視を目的としたモニタリングプログラム、環境中のウイルスや病原性微生物が検出可能な新しい測定システムなどが紹介された。米国では病原性微生物による人の水系感染が懸念され、最先端の測定装置を用い、様々な病原性微生物の環境中での分布調査が行われており、すでに多量のデータベースを構築していることが分かった。講演が終わった後、２時間程度、流域圏総合環境質研究センターの見学会が行われ、研究グループごとに詳細な紹介や議論がなされた。最後に、流域圏総合環境質研究センター側主催によるバンケットが開かれ、夜遅くまで活発な意見交流を行なった。

写真

講演中の様子